

カゲロウ・ソードワールド外伝～東方華陽炎

壱ノ瀬 葉月

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「カゲロウ・ソードワールド」のIFストーリー+二次創作かつ、東方Projectとのクロスオーバーであり、32話のからの分岐となります。

キャラ設定一部無視に注意。

タイトルの読みは「とうほうかようえん」となります。

~~~~~

ここは楽園の世界、幻想郷。魔法使い、吸血鬼、妖精、神様。さまざまな存在が、平和に楽しく過ごしていました。ある日のこと、この幻想郷にある一人の剣士が迷い込みました。「漆黒の魔剣士」と呼ばれ、敬われていた彼は、この世界で何を見、何を感じるのでしょうか……。彼の来訪を受け、幻想郷を守る巫女は、どうするのでしょうか……。

○大まかな時系列設定

イチハが来た時点で、原作の東方紅魔郷〜東方鬼形獣付近までが経過。「Extra」や「Phantasm」のような立ち位置の出来事は基本的に起きていない。(例：ランドール・スカーレットと博霊 霊夢or (& amp; ; ) 霧雨 魔理沙は戦っていない)

○原作者

ZUN

上海アリス幻楽団

# 目次

|             |    |
|-------------|----|
| 第1話〈幻想入り〉   | 1  |
| 第2話〈湖に浮かぶ館〉 | 4  |
| 第3話〈紅茶と魔法〉  | 8  |
| 第4話〈破壊と崩壊〉  | 11 |
| 第5話〈剣士〉     | 15 |
| 第6話〈大きな壁〉   | 19 |

## 第1話〈幻想入り〉

暗闇。とにかく暗かった。どこなのだろうか？ひとつだけ感じるのは、落下感。そしてそれは、どんどん早くなる。そして周りが明るくなり、見えたのは、雲。そして。

——かなり下にある地面だった。

「うわあああああああああああああああああああ?!?!?」

これはいくら何でも叫びたくなる。そんなことをしている間にも地面は迫る。見えてくるのは建物。そして、2人の人。これはこのまま落ちたらまずいと判断し、魔力で翼をつくる。そして思いっきり羽ばたき、あと少しのところまで止まることに成功した。正直まだ状況が把握できていない。というか今の時間だけで把握できたら相当だと思ふ。そしてそれは、あの2人、いや、彼女たち彼女たちも同じようだった。

「空から人が落ちてきた!?!」

「ていうかコイツ飛んだぜ!?!」

片方は赤と白の巫女装束を纏い、頭に大きめなりボンをした茶髪の少女。もう片方は白と黒の服に黒い帽子をかぶった金髪の少女。こちらは茶髪少女よりすこし背が小さいだろうか。俺に対して先に口を開いたのは金髪少女のほうだった。

「お前……誰? あ、私は霧雨魔理沙、普通の魔法使いだ」

「俺はイチハ・リーゼリヴ・ノヴァ。そうだな、漆黒の魔剣士かな」

名前を聞かれたのでそれだけでも良かったのだが、二つ名らしきものも言っていたので元の世界（ここがただ単に違う場所と言う可能性もあるが）で広がっていたものを使う。

「魔理沙下がって。そいつはまずいわ」

茶髪の少女が言う。

まずい要因で思いつくとすればといえれば剣と魔法と二つ名だろうか。確かに剣を下げてはいるが抜いてない。魔法だったらさっきの魔理沙という子が魔法使いと名乗っており、彼女が使っているわけだから危険視されているわけでもない。二つ名は俺が考えたわけじゃ

ない、というかまずそんな危険人物みたいな名前じゃない……と  
思いたい。じゃあ一体何がまずいというのかと考えているうちに、  
答えを出されてしまった。

「そいつ、魔力が桁違いよ。それに普通じゃありえない力も感  
じる」「いや、特に普通だぜ？まあ確かに魔力はでかいが、あり得  
ない力なんてないぜ」

まさか、あの茶髪の少女、巫女装束を着ているということも  
もしかしたら、『あの力』に関するものを……。

「人だろうと妖怪だろうと、危険因子は私が退治するわ！」  
そんなことを考えている間に彼女は飛び上がり、何かを撃つて  
くる。直感的に避ける。恐らく触れていたら死ぬだろう。

「やるしかないってか……」  
先ほどと同じように翼をつくり、飛ぶ。あの弾からは多少の魔  
力を感ずる。もしかしたら――。

左腕の義手に魔力をため、そこから同じ量の魔力を区切りなが  
ら放出してみる。すると形は違いが同じように弾を出すことに成  
功した。とにかく相手の弾を避け、相手に弾を当てればよいの  
だろうか。ふと思いつき剣を抜く。そして弾の前に移動し、剣を  
振る。思ったとおり斬る、というか弾くことができた。これなら  
いけると思った瞬間のことだ。少女はある言葉を叫んだ。

「スペルカード！ 『霊符 夢想封印』！」

その言葉の後から弾の動きが変わった。避けられないことはな  
いし同じように斬れるだろうが、初めての俺にこの密度は難し  
い。どうするか悩んでいると、魔理沙の同じような叫びが聞こえ  
た。

「スペルカード！ 『恋符 マスター……スパーク』！」

俺の前を通って、あの少女に向かって一直線に弾が通った。急  
な乱入攻撃に彼女は被弾し、落ちた。あの落ち方ではおそらく意  
識がない。俺はすぐさま彼女の下へ向かう。手を出し、なんと  
か抱え、ゆつくりと降りる。着地した瞬間に魔理沙が声をかけて  
くる。

「サンキューイチハ！助かったぜ」

「さ、さん……？」

「ああ、そういうの知らない人か。サンキューっていうのは「ありがとう」って意味だぜ」

「なるほど、知らない言葉もあるもんだな」

ゆつくりと彼女を地面に下ろしながら会話する。

「にしてもお前、結構強いのかな。幻想入りしていきなり弾幕ごっこできるなんて大したもんだぜ」

「まあ、あの弾から魔力感じたから同じくらいの量で真似しただけなんだがな・・・と目、覚ましそうだ」

少女はゆつくりと目を開ける。どうやら大丈夫そうだ。

「悪いな、霊夢。邪魔させてもらったぜ。あと、お前を助けたのはイチハだ」

「……そう」

体を起こし、俺のことをみて言う。

「ありがとう、それとごめんなさい。急に攻撃して」

「いやいやいや、いきなり落ちてきたりして、普通だ何だって言えるやつの方がおかしいだろ」

「あ、それ私のことバカにしてるか!？」

いきなり喧嘩吹っかけられたときはどうなるかと思っただが、こうしてみると普通の女の子だ。あの世界に帰れなくても、ここでならコレまでどおり生きていけると、そんな気がした。

## 第2話 〈湖に浮かぶ館〉

あの唐突な戦闘から1時間程後。俺は霊夢にこの世界——幻想郷というらしい——について教わっていた。要約すると、この幻想郷は、博麗大結界によつて幻想郷外部と遮断されている——それでもたまに出入りはあり、入ってきたときは大体《幻想入り》といつて出ることとはほとんどないらしい——ということと、妖怪か人間かにかかわらず、無意味に殺されることはないということ。

そして、これが最も重要だと言うのが、「スペルカードルール」である。この幻想郷では揉め事や紛争を解決するために用いられる手段で、人間と妖怪が対等に戦う場合や強い妖怪同士が戦う際に必要以上の力を出さないためのルール——これは「規則」とか「定め」という意味らしい——だそうだ。

「なるほどな、大体わかった。で、俺はそのスペルカードつて言うのは作つておいたほうがいいのか?」

「異変起こすなら必要かも。でも、逆に解決する側なら特にいらなと思うわ。だって、全部避けてしまえばいいもの」

実際彼女だけでどれだけの種類を持っているのかはわからないが、全部避けられるとは思わない。つまり、俺が思ったのは——

「簡単に言うなよ霊夢」

……魔理沙も同じことを思っているようだ。

「そんなことよりだ霊夢、イチハ、今夜寝る場所どうするんだ?」

「自分の家でいいじゃない」

「もう忘れてるのか? イチハは今日来たばかりだぜ?」

「……なんだ? 夜つてそんな危ないのか」

元の世界では一時期野営をしていたので今日は別にいいかと思つていたのだが、危ないとなるとそう簡単にはいなくなる。

「まあ、危ないといえれば危ないわね……。どうしましうか、神社にも魔理沙の家にも空きはないし……」

「紅魔館でいいんじゃないか?」

また新しい言葉が出てきた。多分話の流れでは建物なのだろう。

どこでもいいのだが、誰が住んでいるのかわからないのはさすがに勘弁したいので、とりあえず聞く。

「なあ、その紅魔館……だっけ？には誰が住んでるんだ？」

「まあ、主は吸血鬼よ。血はそこまで吸わないけどね」

——うわあ、嫌な予感。

ただ、吸血鬼といえどそんなに吸わないと聞いて、正直ほつとした。斬られて死ぬ覚悟はあっても血を吸われて死ぬ覚悟は無い。

霊夢はそのまま境内裏を指差す。

「行くならあっちのほうね。そのまま飛んでいけば湖が見えるから、そのちよつと前で高度下げてね。霧があるけどそのまま入って。そしたら建物が見えてくると思うわ。けどこの時間じゃきついと思うわよ」

「行くだけ行ってみるさ。野営にも多少は慣れてるしな。今日はありがとうな」

「どういたしました。そうだ魔理沙。途中までついてあげたら？だいたい一緒なんだし」

「そうだな、てゆうわけでイチハ、競争しようぜ！」

なぜそうなるのか。まあ、やらない理由はないので俺も準備をする。

「じゃあ合図はしてあげる。・・・よい、始め！」

ちよつと気だるそうな霊夢に見送られながら、意気揚々と進み始める魔理沙と、俺は飛ぶのだった。

「早くないか……イチハ……」

「まあ、4分の3くらいは出したな」

「アレで4分の3かよ!?!」

逆に4分の3のあの速度であの差はすごいと思うのだが。彼女が手を伸ばせば多分足首をつかめただろう。

「じゃあな。紅魔館はあっちだぜ」

「ああ、ありがとうな」

魔理沙と別れ、しばらく飛ぶと湖が見えてくる。高度を下げた霧の



中に入ると、大きい窓の少ない館があった。門の前で降りると、門番らしき人影があった。しかし。

「うわあ……」

無意識に呆れ全開の声が出る。

門に寄りかかって赤い髪で緑の服を基調とした女性が寝ている。果たしてこれは起こしたほうがいいのか。いや、起こしたほうがいいのは確かだ。問題はその後だ。起こして変に誤解されたらたまったものではない。でもまあ、多少はいいかと肩を叩いてみる。しかし。しかしだ。

「反応しねえし……」

強くゆすつても起きない。何回か後ろの門に頭をぶつけてしまったが、それでも反応は一切なしだ。いつそ蹴ったり殴ったりしてやろうかと思ったが……

「……やめた」

俺はあきらめて、門を飛び越えた。そこで俺は立ち止まる。普通なら引き返すべきだ。しかし俺は、なぜか飛び越えるという選択をした。というか誰かにそうさせられた気がする。そんな違和感もちつつ玄関へ向かい、扉を叩く。その瞬間でのことだ。先ほどとは違う強い違和感に襲われた。もっと詳しく言えば、時間を操られる感覚。

魔法には当然種類があり、俺は習得していないが、時間操作系も当然ある。そして俺はそのときの感覚がわかる。いや、わかるように鍛えた。今のは時を進める、もしくは戻すといったものではなく、止めるもの。瞬時に飛びずさり、剣の柄に手を添える。開いた扉の先には、白銀の髪をした青い目のメイドがいる。俺を視認し、体勢を理解した瞬間、目が赤い光を帯び、太もものナイフに手をかけようと――。

「よしなさい、咲夜」

その声が響いた瞬間、目が青に戻り、残りの分を開ける。体勢を戻し、館の中へ入る。なんとなく予想はしていたが、ここにもうっすら違和感がある。こちらは空間にだろうか。外はいじられていないが、中がいじられて広くなっている。奥の階段にいる少女。実体のある羽を持つということはおそらく彼女が例の吸血鬼だろう。

「私はこの紅魔館の主、レミリア・スカーレット。あなたを歓迎するわ」

「どうも、主様。多分その様子じゃ、俺のことは知ってるようですね」「さて、どうかしら」

しらばつくれるか。だが先ほどの2回、いや3回の違和感に関して何かしら聞き出す方法はあるはずだ。

「ずいぶん警戒してるようね。……ああ、なるほど。あなた、咲夜の能力に気付いてるのね」

「……そのメイドさんの仕業もあつたか」

「あら、もしかして私の能力も?」

「どちらが、まではいきませんがね」

「そうそう、敬語やさん付けだとかはいらないわ。咲夜、彼を案内しなさい。それと、皆を集めて」

「畏まりました」

そうして俺は、ある一室へと通されるのだった。

### 第3話〈紅茶と魔法〉

紅魔館の食堂だと思われる場所。館自体が大きい割に、集められた人……でいいのかわからないが、住人であろう者は少ない。

本を読む紫の少女。それに付き添う悪魔。先ほど寝ていた門番。この館の主である吸血鬼。そしてその専属と見られるメイド。他にも妖精が集まってはいるが、周りで見ているだけという印象だ。おそらく主要人物がこの5人なのだろう。

「さて、それじゃあ自己紹介から始めましょう。美鈴」

「はいー」

赤髪で緑の服を着た女性、つまり先ほどの門番だ。

「紅美鈴です！《気を使う程度の能力》を持つてる門番です、よろしくお願ひします！」

次に口を開いたのは紫の少女。抑えているのかわからないが、彼女は魔法使いとして妥当な魔力を持っているようだ。

「……パチュリー・ノーレッジ。《火水木金土日月を操る程度の能力》を持つてる」

「私はこあって呼ばれています。よろしくです」

「この紅魔館のメイド長をしています、十六夜咲夜です。《時を操る程度の能力》を持っていきます」

「改めて、私がこの紅魔館の主、レミリア・スカーレット。能力は《運命を操る程度の能力》よ」

「じゃ、最後は俺だな」

立ち上がり、黒影剣士団式敬礼をして名乗る。

「イチハ・リーゼリヴ・ノヴァ。気軽にイチハって呼んでくれ。剣術と魔法が扱える」

敬礼からすぐに直り、椅子に座る。レミリアは紅茶を口に含んで飲み込んだ後、笑みを浮かべてから口を開く。

「自己紹介は終わったわね。私達のほうは名前だけで呼んでもらって構わないわ。あなたは？」

「俺も呼び捨てで結構」

全員が頷き、俺のほうを向く。

「先に、私たちのほうから質問させてもらって良いかしら？」

頷いて、了承を示す。

「まずは一つ目。咲夜が扉を開けた時、剣に手を掛けていたのはどうして？」

「どうしてって言われてもな……時を操られたっていうのを感じて危ないと思ったから、としか言いようがないな」

その言葉にレミリア以外の全員が驚愕したようだ。確かに、元の世界でもそう簡単に会得できるものではなかったが。

「じゃあ、もしかして私の能力にも気付いていた？」

「多分、門の辺りだろうな。普段なら引き返してるところに入っていった。あの後、操られたような感覚があった」

「ということは、私達の能力の影響から危険を感じてってことでいいのかしら？」

「まあ、そんなところだな」

意を得たり、というかのように頷き、周りに目を配る。気配を察してか、4人も頷く。

「こっちは以上よ。あなたから何か、ある？」

そう聞かれて少し考えるが、思いつかなかったので目線で先を促す。

「本題に入るけど、いいわね？イチハ、あなたがここへ来た理由は？」

博霊神社での出来事から、こちらの世界を通じるだろうと言う単語を選びつつ、自分が幻想入りというものをした存在だと言うこと、この紅魔館に住まわせてほしいこと、住む際の条件があるならできると全てをのむということ話す。

「なるほどね……分かったわ。でも、条件の達成が先ね。咲夜、彼を地下室に案内しなさい」

すると咲夜を含めた周囲がどよめき、パチュリーが声を先ほどよりかなり大きな声を上げる。

「待ってレミィ！いくら彼が剣士で魔法も扱えて能力も持つてるとしても、”彼女”に敵うはずがないわ」

「やってみなくちゃわからないわ、パチエ。死んだらそれまででいいじゃない」

……彼女。「死んだらそれまででいい」と言う発言。そして周りのどよめき方とパチュリーの焦り方。これは人間の命を軽視していると言うよりも、何かに対して”希望はあるが諦めている”のではないだろうか。人の命を軽視しているなら、止めたりはしないはず。まずそもそも中に入れないのではないだろうか。なら、俺になにか――。

そのとき、俺に向けられる一つの視線があった。それは、メイド長である十六夜咲夜。懇願ともとれるその目は、俺を動かすのに十分だった。

「分かった。連れて行ってくれ」

「いいの!?!あなた、死ぬかもしれないのよ?」

「本来ならとつくに死んでるはずだ。もう一度何かの役に立つてから死ぬなら構わんさ」

「・・・そう。なら止めないわ」

そうしてパチュリーの静止を断り、レミリアから“仕事”の内容を聞いた俺は、咲夜に地下室へと案内してもらったのだった。

## 第4話〈破壊と崩壊〉

移動中、そしてその前にレミリアと咲夜から聞いた話では、地下室にいるのはレミリアの妹、フランドール・スカレットで同じく吸血鬼。《ありとあらゆるものを破壊する程度の能力》を持っていて、だが、名前から分かるようにその能力が危険らしく、もし外に出したら何人が殺されるか——いや、壊されるかわかったものではないということだ。

「いざとなったら殺してもよい——とお嬢様はおっしゃっていましたが、恐らく……」  
「本当のところは殺してほしくないだろうな……。そのくらい分かる」

頑丈そうな扉が目の前にある。聞いた話からの予測だが、この程度は簡単に能力で壊せそうなものだ。その疑問を感じたのか、咲夜が説明してくれる

「今、この中では能力を封じる結界が張られています、誰かが入ったら効果は切れるでしょう。私は念のためにお嬢様のところまで戻ります」

「ああ、構わん。上手くいったら連れて行けばいいのか？」

咲夜は頷く。俺も頷き返し、扉を押して、部屋に入った。

咲夜がすぐに扉を閉じる。すぐに暗闇に包まれる。気配はある。なら、その気配から大体の場所を探る。

「あなた……誰？」

少女の声。レミリアに似ていると言われればそんな気はする。だんだんと慣れてきた目でその姿を捉える。

金色の髪に赤い服。細く白い手足。背中には羽らしきものが生えている。なんと言えはいいのだろうか。細めな木の枝に7色の宝石がくっついている、と言えば想像しやすいだろうか。

「イチハ・リーゼリヴ・ノヴァ。咲夜に案内されてきた……。いや、してもらった、かな。だいたいの話は聞いてるよ、フランドール・スカレットさん」

「……そう。でてって」

「そうはいかない。俺はあんたの姉さん……レミアに頼まれたからな。妹を助けて、と」

強く首を振る気配。

「お姉様はそんなこと言わない！言うはずがない。……どうしてもでないっていうなら……」

目と思われる場所が紅く光る。羽についてる宝石っぽいアレもそれぞれ別の色に光り、暗闇を遠ざける。その顔に宿っていたのは——幼さと、強い狂気。

「あなたはこれから、私のおもちゃよ!!」

これは明らかにやるつもりだ。剣を抜き、構えながら動く。フランドールは飛びながら自分の周りに球状に弾幕を張っていく。こちらも弾幕で牽制しつつ接近を試みるが、スペルカードを使われる。

「スペルカード！『禁忌 クランベリートラップ』！」

4箇所配置された魔法陣からピンクの弾幕と青の弾幕が周りから自分のほうへ向かってくる。瞬間的にピンクの弾幕に規則性を見出し、実質のところ青だけを避けていく。そして隙を見て俺も浮遊し、同時に前進する。

「あはは！分かったんだ！」

そういいながらスペルカードから普通の弾幕に切り替える。先ほどと同じ球状だが、今度は放つ頻度が多い。かすりつつではあるが避け、少しずつ、確実に迫る。

「スペルカード！『禁忌 レーヴアテイン』！」

今度は燃え盛る大剣を生成して振りかぶってくる。剣で迎撃し、弾く。実体はないはずだが、かなり重い。5回、6回とやればもたないだろう。ギリギリのところもあるがほぼ全てを避けることにし、隙を見て《バースト・レイン》を放つ。やはりそこは吸血鬼の特性だろうか、複数の蝙蝠となって避ける。そしてそれを弾幕で数匹落とす。

彼女の動きが少し鈍る。だがそれも気休め程度で、すぐに次の行動へと移る。その顔には、今までなかった焦りと、悲しさがある気がした。

先ほどの攻撃が効いたのか、弾幕量がいくらか少ない。だが、攻撃力はほとんど変わっていない。もしこれ以上きつくなるようなら《崩壊》を発動させようかと考えながら戦っていると、かなり大きな隙ができた。普通ならここで突撃するだろう。

——背後にある気配に気付かない限りは。

攻撃態勢に入ったと感じたところで、振り返りながら剣を振るう。2つの軽い感覚と1つの嫌な感覚、具体的に言えば、人を切る生々しい感覚がした。その瞬間、俺はしまった、と思った。彼女の気配は覚えたつもりだったが、どうやらさきほどのスペルカードらしきものは、気配も分割するらしい。あのときのことを思い出しかけるが無理やりせき止める。俺もまだまだだと痛感しながら、彼女の下へと急ぐ。

斬ったのは腹部だったらしく、深くは無いが出血が多い。気も失っている。すぐに回復魔法を——と思ったが、果たして吸血鬼に効くだろうか。初心者で無知な俺がやるよりも専門の人——たとえばパチュリーを呼んだほうが早い。ロングコートを脱ぎ、彼女の傷口に当て、外側に向けて押さええながら運んだ。頼む、死なないでくれ、そう願いながら——。

結果として、フランドールは助かった。今は大図書館という場所でパチュリーが治療している。俺はレミリアと咲夜に説明を求められ、あったことだけを話した。

「……というわけだ。これは俺の未熟さと油断が引き起こしたことだ。罰があるってのなら、なんでも受ける」

「そう。じゃあね……」

レミリアの口元に怪しい笑みが浮かぶ。多分だが、こんなことになつたら皆思い浮かべる感情。そして、俺がここに來てからのこの短期間で何回も思っていること。

——うわあ、嫌な予感。

その恐怖もつかの間、レミリアからその罰が伝えられる。

「私の護衛でもしてもらおうかしら」



「お嬢様!？」

「大丈夫よ、咲夜。私を殺そうなんてしない、そうでしよう?」

頷く。俺には咲夜の気持ちは分かる。大切な人を傷つけられたくないという思い。俺も彼女を傷つけられたりしたら——待て。彼女とは誰だ?俺にそんな感情を抱けるほどの女性はいたろうか?俺がそんな関係まで進めそうなのはレイナくらいだが、彼女は非常にこっそりとクロトに思いを寄せている。だが、他に誰かいたような……。

「どうかしましたか?」

咲夜に顔を覗き込まれ、我に返る。笑顔で首を振りながら、俺は思うのだった。何か、誰か大切なことを忘れている気がする、と。

## 第5話〈剣士〉

紅魔館に来てから一ヶ月。仕事——正確にはフランに怪我をさせたことの罰なのだが——にも慣れ、他の手伝いをする余裕が出てきた頃だ。レミリアに呼び出されていた。

「咲夜と買出しに行つてきなさい」

「じゃあレミリアも一緒に来ないとな」

「……？」

疑問に思っているらしく、首をかしげる。肩をすくめつつ、彼女に言う。

「だって、俺の仕事……じゃないな、罰はレミリアの護衛じゃないか」

というわけで、俺は咲夜、レミリアと共に人間の里に出かけた。レミリアは吸血鬼であり、日光が駄目だということで俺が日傘を差している。食料はもちろん、本なんかも購入している。〈外の世界〉から来るものと、幻想郷に住む妖怪が書くものの二種類があるらしく、レミリアは外の世界から来る本を好んで読んでいる。なんでも、こちらにはない表現が面白いらしい。

そして、ある店である人に声をかけられた。

「こんにちは。レミリアさん、咲夜さん」

そこには、白い薄手の服——シャツというものに、緑の服とスカートを着た二本の剣、恐らく刀を持った白髪の少女が立っていた。

「……彼女は？」

「魂魄こんぱく 妖夢ようむ。半人半霊の剣士よ。半人前って言われてるけど」

「あれ？その方は？」

と俺に視線を向けて聞いてくる。

「イチハ・リーゼリヴ・ノヴァ、漆黒の魔剣士って呼ばれてた人だ。よろしく」

「はい、よろしくお願いします！それより、今……」

そこで目付きが変わる。おっとりとかほんわかとか、そんな優しい目から鋭い刃物のような目。それだけで俺は察することが

できる。

「ああ、剣士だ。言いたいことは、手合わせでもどうですか、だろ？レミリア、いいか？」

レミリアは嬉しそうに頷くが、声は普段どおりだ。

「いいわよ。あなたの戦い方、私はまだ見てないしね」

「ありがとう。咲夜、合図頼む」

日傘を咲夜に渡し、頷いたのを確認してから前に出る。

「イチハさん……でいいですか？弾幕は有り無しどっちがいいですか？」

「どちらでも」

「じゃあ、無し。剣だけの真剣勝負で」

「オツケー……使い方あつてる？」

という俺の言葉にレミリアは頷く。ちよつと安心した。

俺と妖夢は人里から離れ、広いところへ移動する。《人間の里では妖怪は争ってはいけない》という暗黙の了解があり——これは霊夢から聞いた——、一定の距離をとって俺達が立つ。だが、恐らく先の会話を聞いていたのだろう、その距離の1.5倍ほど距離をとって人が周りに集まってきた。

「寸止めでいいな？」

そう聞くと、妖夢は静かに頷く。

二人同時に剣を抜き、軽く構える。

「それでは、戦闘……開始！」

二人同時に動く。妖夢は頭上に振り上げてから袈裟斬りを仕掛ける。剣を割り込ませて防ぎ、そのまま弾く。水平斬りに繋がたが、後ろに下がって避けられる。が、それは計算通りだ。振り抜いた姿勢から刃側を自分の後ろへ向け、魔力を溜めつつ構える。4連撃技《レイディアン・クライ》。防がれても後ろに下がるので、追撃を避ける余裕ができる。

剣が光り始めたのを見て、表情が驚きに染まる。動きを見て防ごうと試みるが、追いきれないらしく構えた位置から予測できる場所に刀を用意することだけらしい。そのまま1撃目。防がれたが、姿勢を崩

すことができた。やはりこの《剣技強化》には対応ができないらしい。次とその次はギリギリのところまで避けられるが、そこでさらに姿勢を崩せた。追い討ちをかけるように刺突を――。

首から指一本分離れた位置に撃った。妖夢は疑問からか突きの威力からか、固まってしまっている。後ろに下がり、普段の通り背中の中の鞘に収める。

「そこまで！勝者、イチハ・リーゼリヴ・ノヴァー！」

その瞬間、周りにいた人たちから歓声上がる。見渡すと最初の2倍くらいに増えている。その中には霊夢と魔理沙がいた。魔理沙が手を振っているの、振り返そうと少し手を上げたところで、背後から声がした。

「いやあく素晴らしい戦いでしたねえ〜！」

振り返ると、そこには黒い羽の生えた女性がいた。

「よろしければ先ほどの技のことを……あ」

金属のこすれる音がして、そちらに向くと咲夜がナイフを抜いていた。

「ま、また後でお話、聞かせてくださいねえー！」

そういつて反対のほうへと慌てて飛んでいった。後から聞いたが、彼女は「を発行している鴉天狗で、名を射命丸しゃめいまる 文あやと言うらしい。咲夜がナイフを抜いた後の反応からして、頭の回転速度は相当だろう。なぜ咲夜がナイフを抜いたかは聞けなかったが。

そのときはそんなことも知らず、アレは誰だったんだと、飛んでいったほうを見ながら考えていた。と、不意に袖を引っ張られる。引っ張っているのは妖夢だった。もうしばらく悩んでいたようだが、意を決して口を開いた。

「イチハさん。良ければ、私の師匠になっただけませんか？」

「師匠……と言われてもな……。剣と刀じゃ扱い方が違うし、戦術的に前に師匠がいたんだろうけど、その人のことも剣術のことも知らないし……」

「大丈夫です。イチハさんは戦い方のコツを教えていただければ、それで」

俺はしばらく、彼女の瞳を見つめた。翡翠色の瞳からは、不安や恐怖などはなく、強い決意だけが浮かんでいた。

「……分かった。まあ、俺は従者だから、主人に相談しないんだけどな」

「本当ですか!?ありがとうございます!!」

「い、いや、まだ師匠になるとは……」

駄目だ。もう人の話を聞いていない。レミアアのほうを見ると、咲夜に何か耳打ちをしている。咲夜が頷いた次には、時間操作の感覚が襲い、気付いたときにはレミアアが隣……いや、レミアアの隣にいた。「週3回、彼女のところに行つてあげなさい。そして、彼女を一人前の剣士にしてあげて?」

「……分かった」

そうして、その日はそこで別れたのだった。

## 第6話〈大きな壁〉

「んー……もつとこう、踏み込んだほうがいいんじゃないか？」

「踏み込む……こうですか？」

「何か違うんだよな……ちよつと失礼」

ある日の昼下がり。俺は妖夢に対して指導していた。

改めて、落ち着いて戦ってみると、教わりかけのように取れる部分  
が数多くあった。全体的な動きから大まかな道筋を予測するのは得  
意……というわけではないが、そこそこにはできると思っていた。し  
かし、彼女の流派はじっくり観察してもよくわからない。恐らく、半  
人半霊である彼女——達、になるかも知れない——が普通の「人」と  
は違うからだろう。

指導を頼まれたとはいえ、どこそこの流派で、という風に言われた  
わけではないので、俺の知ってるものを教えてもいいかもしれない。  
だが、それには今まで身に付けてきた技を全て捨てさせなければいけ  
ないかもしれない。もし何かしらのこだわりがあれば、それは拒否さ  
れるだろうが、そうなる俺は、彼女が強くなる方法が思いつかない。  
「一回、休憩にしよう」

「分かりました。お茶持つてきますね」

そういつて妖夢は、足早に台所のほうへと向かった。

すぐその縁側に腰掛ける。どうしようか悩んでいると、背後から  
お淑やかな声が響く。

「お疲れ様。順調かしら？」

「あー幽々子さん。いやあそれがなっかなかねえ……」

西行寺 幽々子。妖夢が庭師として住んでいる白玉楼の主だ。

白玉楼というのは、幽霊達が次の転生を待つ場所で、冥界に存在し  
ている。死後の世界といってもいいらしいのだが、にしては生きてる  
状態でこちらにこれたり、逆に妖夢や幽々子があちら側にいたりと  
曖昧すぎるように思う。当の本人達はそんなことは微塵も思ってお  
らず、これが「常識にとらわれてはいけない」ということなのかとも  
思ったが、なんか違う気がする。

そんなことはさておき、今俺が感じているもの、俺の考えを話す。幽々子さんは静かに聞いてくれた。俺が話し終わると、「うーん……」と唸ってから彼女の考えを口にする。

「妖夢の剣術は、妖夢のお爺ちゃんから習ったものなの。だから、捨てようとは思わないでしょうね。剣そのものも同じ。……でも、それを活かした上での新しい技術なら、もしかしたら」

「今までを活かした上での技術……か……」

空を仰ぎながら呟く。一応心当たりがないわけではない。が、彼女に扱えるかどうかだ。

というのも、彼女の使う刀《楼観剣》は、俺の知ってる刀に比べ、彼女の身長に対してかなり長い。しかも、俺と同じく鞘を後ろに背負っているので、その心当たりを使うには、慣れと調整が必要かもしれないということだ。もう一本の刀《白楼剣》は迷いを断ち切るもの。無闇に使えば、相手が幽霊や亡霊だった場合は強制的に成仏させてしまうことになるため、あまり抜かないらしい。となると、二刀流を主にさせるのも難しいだろう。

「なんのお話をしてるんですか？」

と、湯呑を乗せたお盆を持って戻ってきた妖夢に問われる。俺は、置いたのを確認してから、真剣に見つめながら話を始める。

「妖夢。俺は正直、これ以上君に教えることはできないと思う。俺の戦い方と妖夢の戦い方が根本的に違いすぎる。だから、俺の技術をすべて教えても、妖夢が強くなれるとは思えない。ただ、まだ可能性はあるんだ」

「可能性……ですか？それは一体……」

「1つ目は武器を変える。2つ目は戦術を変える。ただ、どっちもお爺さんからの形見……なのかはちよつと微妙だけど、それを捨てることになるのは間違いない。そこで3つ目だ。今までのを続けながら、もう一つ戦術を身に着ける」

「もう一つ……戦術を……」

俺の考える利点は2つある。これまで身に着けた戦術を捨てずに済むことと、状況に応じた切り替えができること。前者はともかく後

者は慣れと経験が必要になってくるが、戦闘中の優劣は大きく変わってくるはずだ。今までの戦術に割り込ませる形で覚えさせることになるだろうからかなりきつくなると予想できる。それでも尚、俺の指導で強くなりたいか。そう妖夢に問うと、さも当然のように返ってきた。

「お願いします。私を、もっと鍛えてください」